保育エッセイ

保育における二人称的アプローチ③

「聴き入る」ということ

佐伯 胖
（大学教員）

「聴くこと」は「尋ねること」

昨年、イタリアのレッジョ・エミリアの幼児学校で、保育者（芸術指導員のアトリエリスタだったかもしれない）が子どもにかかわっている保育現場を間近で観察する機会を得ました。幸い、長くイタリアに滞在されてイタリア語に堪能な方がそばについてきてくださっていたので、その場で保育者と子どもの会話を小声で「同時通訳」をしていただきました。

保育者やアトリエリスタが「こうやったら、どう?」というような指示的な言葉掛けをしないことは予想通りだったのですが、むしろ驚いたのは、子ども（三歳前後か）の一つ一つの行為について、「なぜ、そうしたのか」を丁寧に尋ねていることでした。それに対して子どもは、別段うるさがる様子はなく、じっくり考えて、「思ったこと」を答えていました。

そういえば、レッジョ・エミリアの保育者が来日して日本の保育現場を見学したとき、彼女たちが日本の保育についてむしろ驚いていたのは、保育者が子どもに「話しかけていない」ことでした。

佐伯 胖（さえき ゆたか）
田園調布学園大学大学院人間学研究科子ども人間学専攻教授。公益社団法人信濃教育会教育研究所所長。東京大学・青山学院大学名誉教授。

先日、小学校の授業実践を数か月間観察した人から、次のような報告を聞きました。

その報告者が観察した教室では、しょっちゅうけんかをする二人の子ども（女児）がいたのですが、ある時、二人のけんかが始まったとき、担任教師は「あなたたち、教室でけんかをしてはいけません。外に出なさい」と言って、二人を教室から追い出したというのです。その報告者がその後の様子を見ていますと、外に出た二人は、けんかが収まるどころか、ものすごい殴り合いまでやっており、教室に戻ってくることはなかったとのことでした。

ここで疑問です。なぜ、「理由」を聞かないのでしょうか。さらにその「理由」の根拠を確かめないのでしょうか。教師の「視野」から離れたことは、「なかったこと」になるのでしょうか……。

前号の本欄（「『同感』と『共感』」）で述べましたが、シモーヌ・ヴェイユは「聖杯伝説」をもとに、「あなたの苦しみは何なのですか」と尋ねることにこそケアリング（共感、さらには隣人愛）の原点があるとしていました。「聴き入る」ことには、その前提として「尋ねること」があるのです。

「訴え」は欲求のウラにある

子どもが表面的に欲求することをそのまま受け入れればよいとは限りません。このことを次の事例[注1]から考えてみましょう。

事例：「おんぶして！」に込められた願い

とも君はお母さんと買い物に出かけ、くたくたに疲れた帰り道でのこと。とも君は「おんぶし

て！」と言い始めたが、お母さんも疲れていて荷物も持っているので、おんぶしたくない。「もう少しでおうちだよ。がんばって歩きなさい」と言うと、とも君は激しく怒り泣き始めた。しばらくは取り合わないでお母さんは歩いて行くが、とも君があまりに大声で泣くので、世間体も気にしたお母さんは折れて、「しょうがないわねえ。じゃあおんぶしてあげるから、背中にのりなさい」としゃがんだ。

ここで著者（木下ら）は次のように問うています。[注2]

さあ、ここでとも君はどうしたでしょうか。読者の皆さんも少し考えてみてください。ラッキーとばかりに、すぐにおんぶしてもらった？　そう単純にいかないのが、心というやっかいなものをもち始めた子どものなせる行為というもの。では、どんな結末だったか？　お母さんがおんぶしてあげようとしゃがんだ途端、とも君は自分が「おんぶして」と言った地点までわざわざ逆走して戻っていったのでした。「そんな元気が残っているなら、さっさと自分で歩きなさい！」と、筆者なら怒鳴り散らしているところです。

この事例を最初に取り上げた神田（注1参照）は、ここに子どもの要求の二重構造を見たとのことです。つまり、文字通り「おんぶしてほしい」という行為の要求とは別に、「自分の思いを受け入れてほしい」という自我の要求と呼び得るものがあると。[注3]

また、この事例を〝かけがえのない「わたし」のゆらぎ〟という表題のもとに論じている木下

らは、「愛する人に自分の思いが伝わっていないと感じた時、愛情と憎しみの間でゆれ動いたりすることがあります。[注4]」と述べて、自分の「思い」の「ゆらぎ」現象と捉えているようですが、私にはそのようには思えません。

私には、とも君がお母さんに「私を人間として見てよ」と訴えていたのだと思えるのです。

おそらく、お母さんはとも君をただ「わがままな困った子」として見ていたに違いありません。そのようなお母さんのまなざしに、とも君は断固「抗議」する思いで、泣きわめいていたのではないでしょうか。お母さんが「じゃあおんぶしてあげるから、背中にのりなさい」と言ってしゃがみ込んだとき、「お母さんは私の方にちゃんと目を向けてこなかったことを反省してくれたのだ」と思って、自分を無視した地点に逆走して、「ここから出直してほしい」と訴えていたのではないでしょうか。それは自我が「ゆらいで」いたのではなく、しっかりした（ゆるぎない）「人間としての訴え」だったと解釈するのですが、読者の皆さんはどうお考えでしょうか。

注

1　木下孝司・加用文男・加藤義信編著『子どもの心的世界のゆらぎと発達―表象発達をめぐる不思議』ミネルヴァ書房　二〇一一年　p. 54。
（ただし、ここで挙げた事例は以下で紹介されているものを若干補正したものとのこと。神田英雄著『伝わる心がめばえるころ―二歳児の世界』かもがわ出版　二〇〇四年）

2　同 p. 54。

3　同 p. 55。

4　同 p. 56。